

Aesthetic Life

Hideo Nakane / Seiji Hirata, 2010

エステティック / ライフ - Aesthetic Life -

過去は現在を決定する。その衝撃をよく考えてみるべきなのだ。これは単に形式的なことではなく、個人的な経験からなのだ。私が年をとり、過去の出来事から遠く隔たったのに、過去それ自身が迫ってくる（ノスタルジアとかそんなものではなく！）。すでに歴史の中に葬られてしまったであろう私の若かった頃の出来事が、まるで今起ったかのようなのだ。時間と歴史はもうリニアな経験ではすまない...
ギャラリー内には7人のアーティスト（まだ生きていようと既に死んでいようと）がいる。今、彼らの作品は調和している - そんな準備がこの単色の空間にはできている...
ここには全て静寂が与えられている。たぶんそれはあなたが選んだ作品のそれぞれが、内省的だからである - つまり単なる物語的な意味以上のことを考えてくれるよう促しているのだ。

Amikam Toren 『The pleasure of aesthetic life』展カタログより（訳：平田星司）

1990年代中頃のイギリスはブレア政権誕生前の経済が低迷するさなか。一方、美術といえばDamien HirstやRachel Whiteread、Anya Gallaccioらに代表される若手アーティストが、社会に対する批評性の強い作品を繰り広げる。そんな96年、ロンドンのShowroomギャラリーで『The pleasure of aesthetic life』という展覧会が開催されました。前述のAnya Gallaccio他、Douglas Gibb, Denise Hawrysis, Georges Perec, Daniel Spoerri, Gera Urkom & John Wilkinsという6組7名のアーティストの展覧会で、その企画をしたのが平田の Brighton 大学時代の師でもあるAmikam Toren氏（1945年エルサレム生まれ）です。

『The pleasure of aesthetic life』。この「aesthetic」というのは日本語に訳すのが困難な言葉のひとつです。「aesthetic」という英語の語感と、例えば「美の」「美学の」などの日本語のそれとの間に、微妙な感覚的差異が生じてしまうから。その差異を踏まえ、私たち二人はこの翻訳不能な「エスティティック」な日常に悦びを持つことこそが「美術」の本質であり、あるいは逆に、「その美術」こそが私たちの疲弊した日常を救済するほとんど唯一の手段であると信じているのです。

Toren氏の言葉のとおり過去は現在を決定します。私たちは帰国後10余年を経て、日本に於ける美術の現状に対し確固たる提案をするべき時が来ていると考えているのです。英国での生活を通して体感した「美術」あるいは「美」というものに関する本質的な何か／「エスティティック」を作品にして取り交わしてみせること。

この展覧会を今なおイギリスの第一線で活躍されるToren氏に捧げるとともに、私たちの展示をご覧になる多くの方々が、「エスティティック / ライフ」を共有されることを願っております。

2010年3月

中根秀夫 / 平田星司

works

Hideo Nakane

▶中根秀夫 神奈川県在住

- 1966 千葉県生まれ
- 1992 東京芸術大学美術学部絵画科卒業
- 1993 プリティッシュ・カウンシルの奨学金を取得
- 1995 ロンドン大学スレード美術校修士課程絵画科修了

▷おもな個展

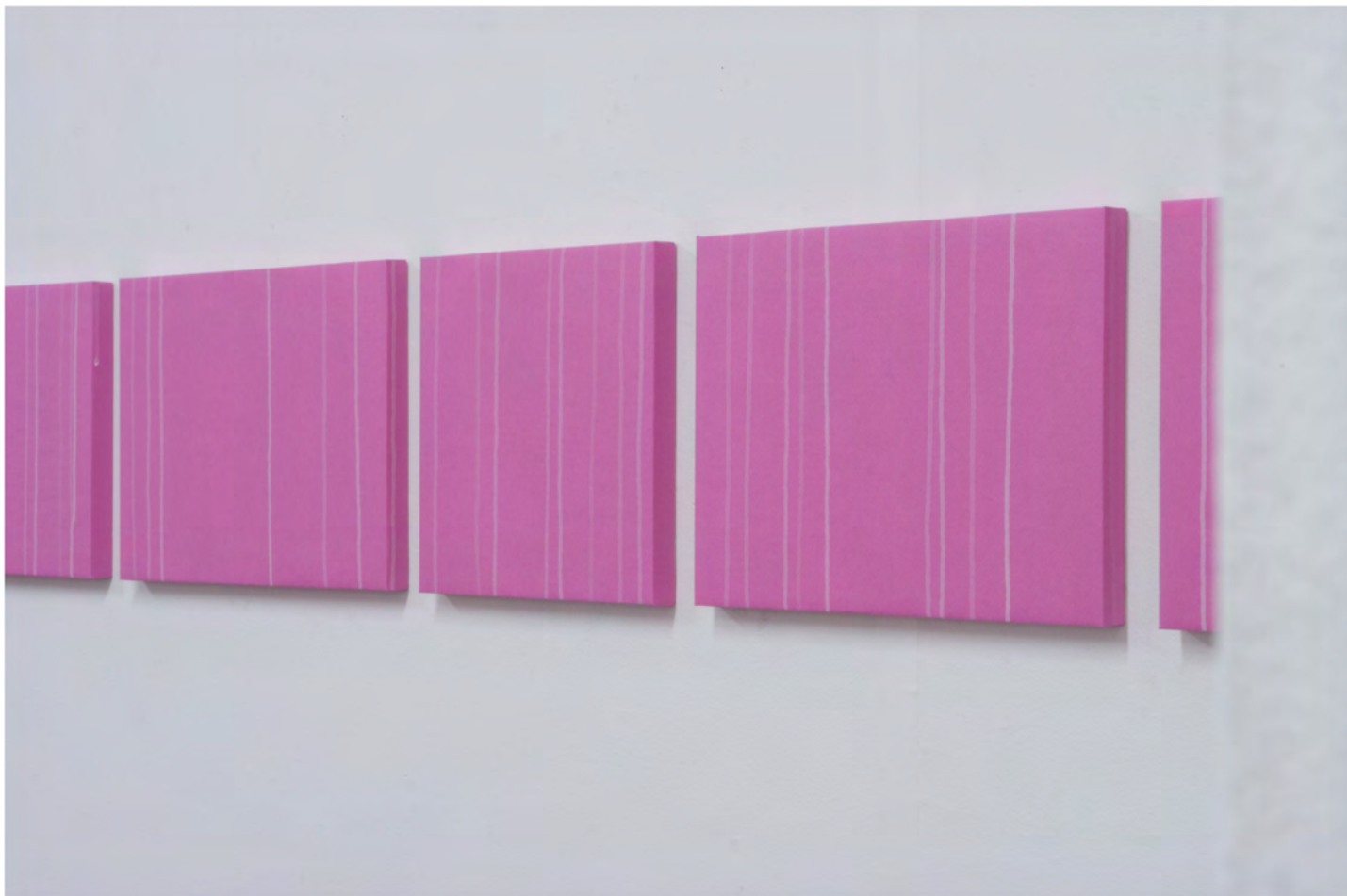
- 1997 「日常-Ordinary Time」 厚木市文化会館／神奈川（厚木市文化会館事業協会後援）
- 2000 「子供の情景-Kinderszenen」 厚木市文化会館／神奈川（厚木市文化会館事業協会主催）
- 2004 「"Kinderszenen" and Otherness」 ガルリ ソル／東京
- 2006 「in ten years」 ガルリ ソル／東京
- 2008 「White Plan」 ガルリ ソル／東京

▷おもなグループ展

- 1997 「VOCA展97」 上野の森美術館／東京（推薦：埼玉県立近代美術館 梅津元）
- 2001 「The London Group 2001」 Woodlands Art Gallery, London
- 2002 「The London Group 2002」 Trinity Theatre & Arts Centre, Tunbridge Wells
- 2005 「四人展」 Bankside Gallery, London



Kinderszenen / 2001 ガラス, 紙にアクリル絵の具, 鏡, 木, 塗料 H9.7×W23.5×D12.6 cm









Seiji Hirata

▶平田星司 東京都在住

- 1967 東京生まれ
- 1991 東京理科大学理学部第二部物理学科卒業
- 1994 ブライトン大学絵画科卒業
- 1996 ロンドン大学スレード美術校修士課程絵画科修了

▷おもな個展

- 2000 「マイナスの絵画」 藍画廊／東京
- 2001 「1つの部屋に、1つの絵画」 藍画廊／東京
- 2002 「残されるもの／Leftovers」 藍画廊／東京
- 2004 「その手の話」 藍画廊／東京
- 2005 「シンポジウム」 ギャラリー森／三浦市 神奈川
- 2006 「静かな広場」 ガルリ ソル／東京
- 2007 「赤と黒」 ガルリ ソル／東京
- 2008 「界面」 藍画廊／東京
- 2009 「reawake」 ギャラリー一現／東京

▷おもなグループ展

- 2009 アートプログラム青梅2009「空間の身振り」展 旧青梅織物工業共同組合／青梅 東京

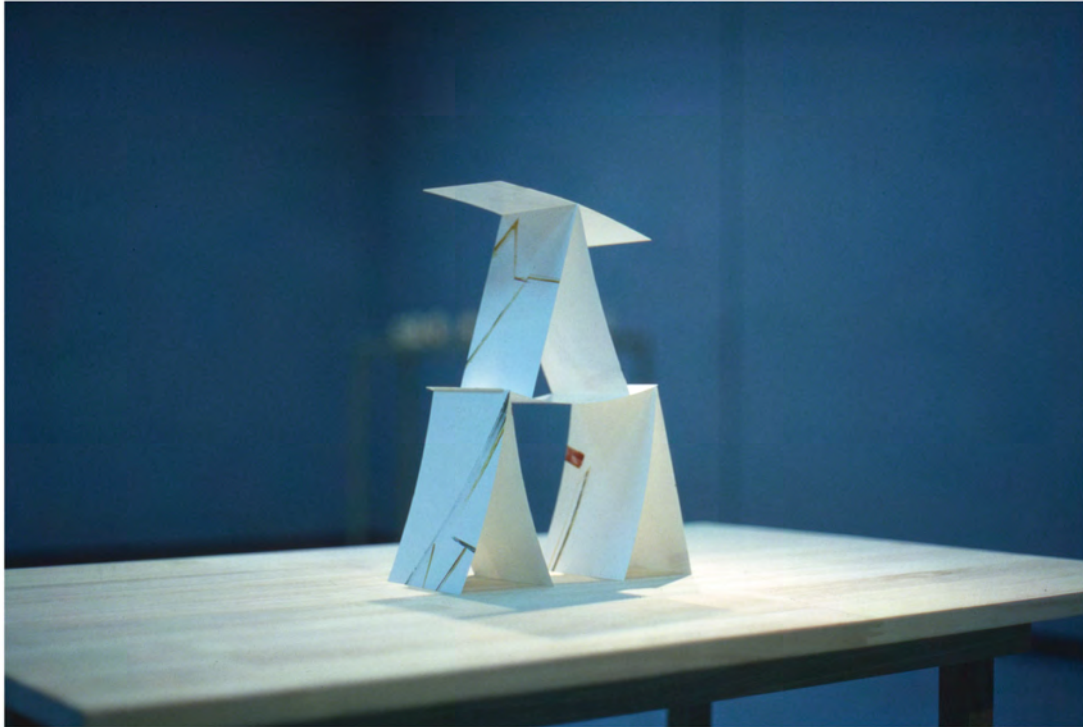


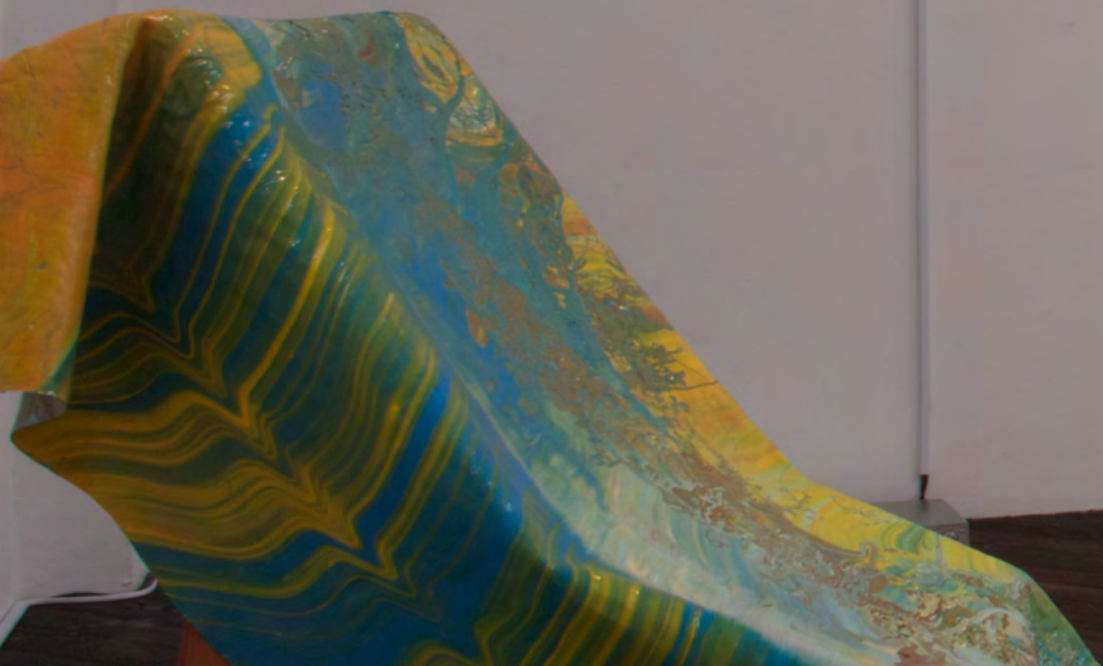
静物—テイスティンググラス, 本など / 2007 棚, オブジェに黒鉛, 顔料 H37×W50×D32 cm









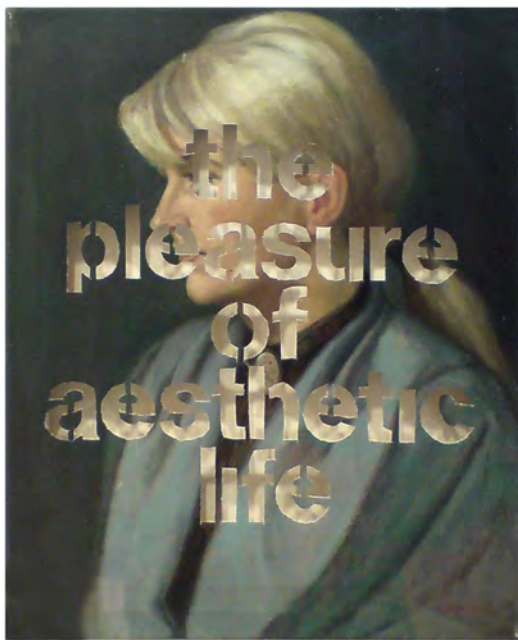




Aesthetic Life 2010 at Toki Art Spase



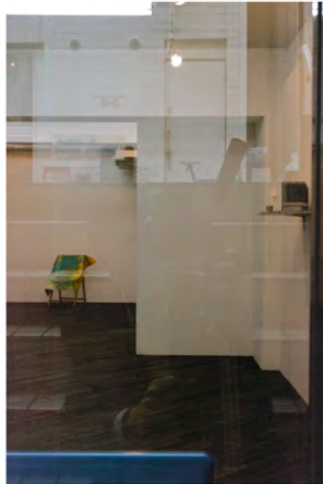




左はAmikam Toren氏が90年代から継続して制作している『Armchair Painting』というシリーズ。マーケットなどで売られている日曜画家が描いた絵を購入し、文字を「カットアウト」して作品としている。レディメイドとしての絵画を素材にすることで、芸術作品は誰に帰属するのかを問うている。またルーチョ・フォンタナ（1899～1968）が開いた「カットアウト」という絵画へのオブジェクティブなアプローチの現在を見るようでもある。

一方で、同シリーズから派生した『Narrative Painting』は、Toren氏がこれまで切り抜いたアルファベットを組み合わせて、テキスト（例えば彼が実際に見た夢などがその内容）として直接壁面に提示するという試みも行なっている。

Toren氏の作品の多くはこのように「loss=失われるもの」が通底しており、そのことが「叫び」にも似た、そしてアイロニーを含んだ力強いイメージを現前させていると言えよう。



Aesthetic Life 2010

© Hideo Nakane & Seiji Hirata, 2010
Courtesy of Toki Art Space, Tokyo

<http://hideonakane.com>

http://homepage.mac.com/seiji_hirata/